

令和6年度 自己評価報告書 <八戸学院聖アンナ幼稚園>

<実施日> 令和7年1月8日（水）

<参加者> 山西、河原木、工藤、笹山、外館、田中、中田、沼沢

<内 容>

1. 令和6年度重点目標

- I モンテッソーリ教育の充実
- II 食育への取り組み
- III 地域における子育て支援への取り組み

2. 重点目標に対する取り組み内容

評価項目	取り組み状況	評価
I モンテッソーリ教育の充実	<ul style="list-style-type: none">・園児一人一人の成長に合わせたかかわりを重視し、縦割りのクラス編成で子どもが自主選択した活動に取り組むことを軸とする保育を展開した。職員間での情報共有や園内研修等を通して、全職員で全園児のことを理解するよう努め、日々丁寧な保育を心掛けた。・法人内上級学校と連携し、音楽・造形・英語・保健安全など様々な分野でより専門性の高い活動を展開した。・四季折々、園外に出かけ自然体験、実体験の充実に努めた。・7月～10月において ECEQ®（※1）に取り組んだ。Step 4 の公開保育では、八戸市教育委員会や市内小学校、県内幼稚園、および養成校からの参加があり、保育参観や分科会において本園への評価を受けた。・「子どもに良いものを」との思いから、施設は大切に丁寧に使用することを心掛け、こまめに修理修繕に努めている。	B

II	食育への取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたち一人一人が食への興味関心を持つことができるよう、日常の保育で食をテーマとした遊びやお話を展開した。 ・6月の「種ばくだん」(※2)では、野菜に特化した種ばくだんを作り、栽培・観察・収穫することで様々な種類の野菜の成長を間近に見て興味を深めることができた。今年度採取した野菜の種は、来年度の種ばくだんに使用することで、命の引継ぎを感じてもらう。 ・従前の“野菜切り”という取り組みに加え、その野菜くずを利用してコンポストでの堆肥づくりを試みた。今年度のコンポストでできた堆肥は、来年度の畑づくりに利用し取り組みを継続していく。 ・年間を通してジュース作り、お料理会、クッキー作り、もちつきなど、四季折々の各種行事において食に関する活動を実施した。 ・八戸学院大学の健康医療学部人間健康学科の教授に、保護者のための料理教室の開催や家庭通信への寄稿をしていただき、家庭での食育促進を図った。 	B
III	地域における子育て支援への取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・モンテッソーリ教育について専門的に学んだ教師が担当し、概ね月1回の未就園児教室を開催した。年齢に適した環境を整え、育児相談も行った。 ・卒園児（小学1年生～3年生）を対象とした同窓会「おかえり聖アンナ幼稚園へ」を開催し、児童に自らの成長を感じ取ってもらい、保護者に対しては卒園後も共に成長を見守っていることを知っていただく機会とした。 	B

評価 (A : 十分に成果がった B : 成果があった C : 少し成果があった D : 成果がなかった)

※1 Early Childhood Education Quality System の略

(一財) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が開発した“公開保育を活用した幼児教育の質向上システム”

ECEQ®コーディネーター有資格者の指導の下、次の Step 1～Step 5 に取り組む

Step 1 … 「事前訪問」 ECEQ®の趣旨説明、園長・教頭などへのヒアリング

Step 2 … 「事前研修」 自園の良さや課題を見つける、公開保育で期待したい成果を見つける

Step 3 … 「準備」 問いづくり、案内づくり、資料作り

Step 4 … 「公開保育」 オリエンテーション、見学、分科会（協議会）、全体会

Step 5 … 「事後研修」 フィードバック検証する、自園の良さや課題を見つける、成果を整理する

※2 農哲学者 福岡正信氏（1913－2008）が考案した自然農法の一つ“粘土団子・seed pellets”とも呼ぶ

3. 総合的な評価結果

評価	理 由
B	<p>ECEQ®に取り組む中で、自園の良さや魅力について再認識するとともに、課題も明確になった。モンテッソーリ教育の充実は、全職員の願いであると同時に、ゴールのない常に上を目指すべき目標であるため、今後も一人一人の教職員がそれぞれに学びを深めるとともに、園全体での質の向上を目指し園内研修の開催、モンテッソーリ研修への積極的な参加が必要である。</p> <p>食育や地域の子育て支援など新たなことに取り組んだ部分は評価に値するものの、それらを外部へ発信する力の弱さが感じられる。</p> <p>地域における子育て支援としては、幼児期までの子どもの育ちを支えることの大切さを地域社会に対して強く発信しなければならないと感じている。</p>

評価 (A : 十分に成果があった B : 成果があった C : 少し成果があった D : 成果がなかった)

4. 令和7年度に取り組む課題

	課 題	具体的な取り組み方法
I	モンテッソーリ教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの子どもに適した教育の実践 ・法人内上級学校との連携による教育活動の実践 ・自然体験、実体験の充実 ・教職員の資質向上
II	子どもの育ちに適った運動環境への取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが育むべき基本動作を踏まえた環境づくり ・子どもの運動に関する研究への取り組み
III	地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・幼小連携の推進 ・はじめの100か月（妊娠期から幼児期まで）への支援活動 ・地域に根差した教育保育活動への取り組み

令和6年度 学校関係者評価報告書

多様な立場の方々の参加によって、次のような様々な意見・感想・課題を得ることができた。

【意見・感想】

- ・整理整頓されている教育環境であると感じた。
- ・子ども同士のかかわりの中で、年上の子が年下の子に対し折り紙を教える様子などが多く見られ、縦割り保育の良さが非常によく現れていると感じた。
- ・教師の子どもへのかかわり・声掛けが丁寧で、一人ひとりの子どものやりたいことを尊重し、寄り添っていると感じた。
- ・自分でできること（自立）を大切にする教育であると感じた。
- ・地域との連携で園の行事に参加した際、両親共に参加している様子を目の当たりにし、ライフワークバランスへの気づきがあった。（一般企業の方より）

【課題】

- ・昨今の社会情勢を鑑み、自立とともに依存することも認める気持ちを育てる必要性を感じている。
- ・幼児教育への園の取り組みについて、情報発信の工夫が必要ではないか。
- ・日々の活動において、子ども本人がどのように育ちたいのか、更に保護者はどのように育って欲しいと望むのか、といったことにも思いを巡らしつつ、幼稚園の目指す幼児教育に取り組んで欲しい。